つらい体験後の2歳前後の幼児の遊びに見られる治癒的な力

The therapeutic power of play in toddlers after a traumatic experience

松　岡　展　世（作新学院大学臨床心理センター）
Matsuoka Nobuyo（Sakushin Gakuin University, Center of Clinical Psychology）

目　次

1．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
2．遊びの治癒的な力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
3．遊び場面の分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
　3-1. 震災後の2歳6ヶ月児の遊び ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
　3-2. 19日間の母子分離と里親養育の後の1歳9か児の遊び ・・・・・・・・・ 115
4．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
5．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
6．引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119

要　約

遊びは子どもにとって自然な表現言語であり、つらい体験をした子どもは遊びを通して回復していく。本稿では、一般的なプレイセラピーの適用年齢よりも幼い2歳前後の子どもたちがつらい体験をした後に自発的に見せた遊び場面を2つ取り上げ、子どもの体験がどうであったのか、そこにどのような遊びの力が見られるのかを検討した。その結果、2歳前後の子どもであっても、身近なリソースとなる大人の支えの元で遊びを介して体験を乗り越えようとする試みが見られることが示唆された。また、その体験には、子どもを理解しようとする敏感な応答性を持った大人の存在が必要であることも示唆された。

キーワード：遊びの治癒的な力、2歳児、つらい体験、大人の役割、敏感な応答

Keywords: The therapeutic power of play, toddlers, traumatic experience, the Role of adults, sensitive responsibility

１．はじめに

遊びは子どもにとってもっとも自然な言語であり、Landreth,G.L.（2002）は「私たちが子どもの遊びをコミュニッケ―ションの自然な媒体としてとらえるとき、その価値はずっと理解されます」と述べている。子どもは日常の生活のなかでいつも体験していることも、真新しい体験も遊びの中で表現する。たとえば、親子でのプレイセラピーの場面で、２歳前後の子どもがトイレのおもちゃを使ってトイレットトレーニングの遊びを繰り広げることがある。自分が最近行っているトイレットトレーニングを遊びで可視化することで、「自分はこういう体験をしていたのだ」と体験を整理したり、「ちっちできたね、よかったねぇ」と遊ぶことで、成功体験を疑似的に味わったりしている。

一方、圧倒されるような体験をした後にも、その体験に関連した遊びがなされることがある。著者は、東日本大震災の直後から、日本プレイセラピー協会の理事の一人として、日本プレイセラピー協会と日本ユニセフ協会で共同で行った震災支援活動に５年間従事していた。その際、広い地域で地震ごっこ、原発ごっこをする子どもたちがいたことを知った。Landreth,G.L.（2002）によれば、アメリカの同時多発テロの後には、子どもたちのテロを素材にした遊びが見られたという。このような遊びは、子どもにとっては、体験を理解したり整理したり、あるいは、仲間とともに遊ぶことで怖さを乗り越えたりするのに役立つことがプレイセラピーの様々な知見から分かっている（大野木, 2019,Landreth,G.L.2002,Kottman.T,2011）。

こうした遊びの中で怖さに向き合い乗り越えようとする試みは、言葉で大人や友達とのコミュニケーションが活発になる３歳以降だけでなく、２歳児でもみられる。富田（2016）は、２歳児クラスにおいて、仲間と一緒に想像上の怖いものを楽しむ遊びに注目し、１年にわたる記録から、その遊びの展開過程と意義、保育者の果たす役割を示し、虚構と現実の区別が未発達な２、３歳児においても、仲間と共に怖さを楽しむ遊びを通じて、遊び意外の場面でも強さや挑戦する力が育っていることを報告し、そのために保育者の果たす役割の重要性を述べている。

原発ごっこや地震ごっこは、被災地で“つらく悲しい思いをしている人がいるのに不謹慎だ”として叱られたり制止されたりすることもあったと聞いた。自身も傷ついたり、周りを思いやったりしている大人たちがこうした遊びに胸をいため、また眉をひそめるのは、これらの遊びの意味や必要性を知らなければ、自然で無理のないことである。しかし、もし身近な大人がこうした子どもの遊びの意義や必要性を理解し、関わり方を知っていれば、状況の工夫やまた違った展開がみられるだろう。そのために、子どもの自発的な遊びの意義を理解し、大人の役割を検討することには意義があると考える。

プレイセラピーは、近年では乳幼児への適用の拡大もされてきている（Schaefer,Kelly-

Zion,McCormick,&Ohnogi,2008）ものの、一般的には３歳～11歳頃の子どもに適用されることが多い。それは、言語の仕様が可能になり、象徴的な遊び表現も豊かになる年頃であることによる。

本稿では、プレイセラピーの一般的な適用年齢より幼い２歳前後の幼児を取り上げた。幼い子どもが圧倒されるような怖い体験やつらい体験のあとで展開した遊びを詳しく見ていくことで、そこにどのような力が働いているのか、大人の果たす役割を検討するのが目的である。

２．遊びの治癒的な力

Winnicott,D.W.（1991）は、子どもがなぜ遊ぶのかという問いに対して、怒りを扱うことと不安に対処することをあげている。また、大野木（2019）や Schaefer,C.,&Drewes,A.（2011）、Kottman,T.（2011）は遊びのもつ治癒的な力をまとめている。以下は、遊びの治癒的な力についてまとめた表である。

表１　遊びのもつ治癒的な力

１　コミュニケーションの促進	**３　社会関係を強化する**
①　自己表現	⑪　治療定関係性
②　無意識と意識の橋渡し	⑫　アタッチメント（愛着）
③　直接的に教える	⑬　社会的な能力
④　間接的に教える	⑭　共感
２　健全な情緒を育む	**４　個人の強みを伸ばす**
⑤　カタルシス	⑮　創造的な問題解決
⑥　徐反応（アブリアクション）	⑯　レジリエンシー（心の回復力）
⑦　肯定的な感情	⑰　道徳心の発達
⑧　恐れに関する拮抗条件付け	⑱　心理的な発達の加速
⑨　ストレスへの免疫づくり	⑲　自己調節
⑩　ストレスマネジメント	⑳　自己肯定感
㉑　コントロール感	

※大野木（2019）p25の表を元に、Schaefer,C.,&Drewes,A.（2011）p15-22を加味して著者が改変

本稿では、上記の遊びの治癒的な力を手掛かりにして、子どもにとって辛い出来事のあとにおきた遊び場面を２つ取り上げ、子どもの体験はどういうものであったか、遊びがどのような役割を果たしていたのかを考えてみたい。１つ目は著者が直接観察した２歳児の親子の遊び場面を本人たちの同意を得て提示する。２つ目は、1950年代にイギリスでロ

バートソン夫妻によって撮影された２歳前後の子どもの映像記録と書籍から遊び場面を引用し、提示する。

３．遊び場面の分析と考察

3-1. 震災後の２歳６ヶ月児の遊び

3-1-1. 背景及び遊び場面のエピソード：２歳６か月　女児　あいちゃん（仮名）

【背景】

あいちゃんは、30代の両親（母親は第ニ子を妊娠中）と３人で暮らしていた。東日本大震災のあった日、震度５弱の揺れで家の中のものが散乱し、一家は一夜を近場の避難先で過ごした。次の日の夜、父親の「命を守ることが何より大事だ」との決断により、一家で自宅を離れて、他県に住む母親の姉（著者）宅に移動し、一時避難として２泊過ごしてから、遠方の母親の実家での里帰りを前倒しすることにした。あいちゃんは言語発達が早く、感じやすくて慎重なタイプであった。親戚宅に到着してしばらくはぎこちなかったが、親がくつろぐにつれ穏やかになり、笑顔も見せていた。

【遊び場面】

親戚宅に避難して２日目の日中、皆でひざしのふりそそぐリビングでくつろいでいるときのことである。母親の見守る中、画用紙にお絵かきして遊んでいたあいちゃんは、母親の腕に触れ「おかあしゃん、絵ー、かいて」とねだった。「おかあさんが描くの？」「何がいいかな？」と母親がアンパンマンなどいくつかの絵を描くと、今度は「あいちゃん描いて」とねだった。お母さんがにこにこした女の子の絵を描くと、それをみて「えーんて泣いてるとこ」と笑ってリクエストした。お母さんが「泣いてるとこ？」と聞くと、あいちゃんはうなずき、お母さんは隣に、「よーし、こうかな～？」などといいつつ泣き顔のあいちゃんを描いた。それをみたあいちゃんは、「もっと！えーんえーんて」と言い、お母さんは、「こうかな？」と、その絵の上に描き足して、あいちゃんがさらに口を大きくあけて、大粒の涙をとばして泣いているところを描いた。あいちゃんはその絵を満足そうに見て、今度は「よしよししして」と言った。その瞬間、母親はなにかハッとしたように見えたが、変わらぬ明るい雰囲気で、「そうかぁ、よしよししてるとこね」と、絵の中で、お母さんが大泣きしているあいちゃんを膝に乗せ、後ろからぎゅっと抱き抱えるようにしている“よしよししている絵”を描いた。そして、体をぴったりとママにくっつけてきたあいちゃんのことを自分の膝にのせて、左右にゆっくりゆらゆらした。あいちゃんは照れているような嬉しそうな表情で、心地よさそうに揺られていた。

【その夜の出来事】

夕食で鍋を囲み、みんなでもうすぐ食べ終わろうかという頃のことだった。すでに食べ

終えておとなしくなっていたあいちゃんが、お母さんにだけ聞こえるような小さな声で「あいちゃんの…」と言っている。「ん？　なに？」と母親が顔を向けると、今度は、少し訴えるような抑揚のついたトーンで「あいちゃんの…」と空になった自分用の皿を指している。「え？これ？　あ、あいちゃんが食べるんだったの？」あいちゃんがうなづく。「アハハ、もう食べ終わったと思ったから、お母さん食べちゃったよ～、ごめんごめん」と明るくいう母の声をききながら、目に涙を浮かべて「あいちゃんの＊＊＊＊（聞き取れず）」といい、ついに、わーんと泣き出した。とりなそうとする父親を制して、お母さんがあいちゃんを抱っこし、「そっか、そっか～。あいちゃんのだったんだね。お母さんが食べちゃって、やだったねぇ」と声掛けをしながらなだめ、あいちゃんはしばらく胸に顔をうずめて泣いてから泣き止んだ。

あいちゃんが寝付いた後の母親の話では、あいちゃんは地震直後も避難所でも一度も泣かずにいて、この時初めて泣いたのだという。「きっと、泣きたい気持ちがあったけどずっと我慢してたんだと思うんだ」と、悔やんでいるという避難先での出来事を教えてくれた。避難先から一時、あいちゃんを連れて自宅に身の回り品を取りにいった際、あいちゃんが、自分の使っていたキャラクターの歯ブラシを見せて、何度も「これ、あいちゃんの？」と聞いたのだという。最初は、「そうだよ、あいちゃんのだよ」「ほら、アンパンマンがついてるでしょ」と言葉で応じていたが、限られた時間で物を集める中だったので、ゆっくり対応する余裕がなかった。その後、避難先でも何度も「これ、あいちゃんの？」と聞かれ、「うるさい！あいちゃんのって言ってるでしょ」と声を荒げてしまったのだという。「びくっと固まって黙っていて…その時も泣かなかったんだよね。可哀そうだった。私も余裕がなくなっちゃってて」と振り返っていた。そういう母親も、妊娠中で疲れやすい中で、夫が仕事で不在中、小さい子を抱えて怖い目にあい、それでも限界まで必死に対応してきたことが感じられ、著者も胸がしめつけられた。そして、親子ともやっと人心地ついて自分を出せたことが嬉しく感じられ、2歳の小さな子が遊びで見せた力、敏感に受けとめて反応する母親、そして、何より優先して妻子の安心・安全を守ろうとした父親の迫力のようなものを尊敬の思いで見ていた。

なお、このエピソードはこれまでも母親の了解を得て大学の授業等で紹介していたが、今回改めて論文掲載の同意を得るにあたり母親と本人に話をしたところ、母親は「あの日に何があったかや会話などは記憶喪失」「とにかくあたたかく迎えてもらって、心底安堵したのは覚えている」と述懐していた。

3-1-2. 遊び場面の考察

【子どもの体験】あいちゃんは、この一連の遊びでどのような体験をしていたのだろうか？観察された表情や様子、そして前後の文脈から考えてみたい。文中や（　）内の丸数字は、

表１の遊びのもつ治癒的な力の表内の対応する項目番号を示すものである。

まず、遊びの展開が順次段階的であることについて見てみたい。あいちゃんの描画のリクエストの内容は、母親が応じるごとに、自分と関連のない絵から、自分自身の絵へ、そして、感情の表現へと変化していった。応答してもらうたびに順次、より内的なニーズに近い要求がでてきているように見える。最初に絵を描いてもらったときには、描かれたアンパンマンの絵を見ながら、“今はお母さんがゆったりしていて、優しく応じてくれる”“避難先とは違っていつものお母さんだ”という手ごたえを実感をもって感じたのかもしれない。次に、自分自身を描いてほしいという要求は、間接的に自己表現（①）を手助けしてもらっていると考えられる。自分の描画スキルでは自分の満足のいく絵が描けないからかもしれないし、他でもないお母さんに自分を描いてもらうことで、自分を大事にされている感覚も生じたかもしれない。続く泣き顔の要求は、にこにこ顔の絵を見て、にこにこした心の動きが体の中で生じ、他にも出たがっている気持ちと通路がつながったのかもしれない。「絵の中で泣いたらどうなるだろう？」という実験的側面もあったかもしれない。（②無意識と意識の橋渡し）。このように、前の体験の手ごたえと満足をもって、段階的に遊びが展開していっていることが見て取れる。

次に、泣いている自分の絵を見ているときの体験について見てみたい。この時、あいちゃんは身体感覚的にはその場の母親とのおだやかな雰囲気に包まれながら、泣くという感情を表現している（絵の中の）自分が受容されていることを感じていたのではないか。Winnicott,D.W.（1991）が、「遊びとは、ちょうど大人が服を着るのと同じように、「自分に正直であること」ができる」と述べているように、遊びは、虚構の世界だからこそ、現実世界でのような責任の追うことなく、試行実験をしてみたり、安心しありのままの自分を感じたりすることができる。実際に泣くのではなく、遊びの世界の中で、泣いても（涙で気持ちを表現しても）大丈夫という感覚をつかんだあいちゃんは、さらに試行実験を進めて、泣きの度合いを「もっと」強めるように要求した。大泣きの絵を満足そうに見ていた姿からは、そこに間接的に代理の表現を受容された体験があり、なんらかのカタルシス（③）が起きていたと考えられる。そして、自分から「よしよしして」となぐさめを求めた。絵だけでなく自分自身もよしよししてもらったことは、身体的な安心感と受容された感覚につながったであろう（⑨ストレスへの免疫づくり）。

最後に、この遊びの果たした役割を考えてみたい。あいちゃんは、この遊び場面の後に初めて、些細なことをきっかけに、震災後に声をあげて泣いた。避難先で歯ブラシの件で怒られても泣かないで、フリーズして抑圧していた感情が、まずは遊びの中で親に受け入れてもらって、安心をもらったからこそ、“自分のお皿の食べ物を不本意に食べられて悲しい”というその時の気持ちが実際に泣くという行動を伴って表出されていたと考えられる。泣くことは、人がトラウマやつらい体験から解放に向かうサインの１つであり（藤

原，2020)、あいちゃんは実際に泣けたこととそれをなだめてもらえたことで、母親の助けを得て神経系の協働調整（co-regulation）がなされ、1人では乗り越えられなかった神経系の調整と回復が可能になったと考えられる。

【大人の関わり】

この遊び場面での母親はゆったりとくつろいだ様子で、あいちゃんからのリクエストにも楽しそうにプレイフルな声のトーンで応じていた。母親が果たした役割は、ただ単に要求に応じただけではなく、言葉にされていない娘の気持ちやニーズをくみ取り、敏感に応えていたことにもある。この遊びは、温かな関心を向けながら応じた母親との相互作用的なものであり、このような大人の存在があってこそ展開したと考えられる。

幼い子どもは自分ひとりで圧倒される感情を扱い、神経系の反応をなだめることが難しいため、そばにいる大人がなだめてあげ、協働調整する必要がある（Kathy,Stephen、2018）が、母親は遊び場面では絵の中で（そして夜間には実際に)、なだめることを行っていた。

このような遊びが可能になった背景として、もともと日ごろから子どもの気持ちを汲んだやりとりを重ねてきた親子であり、母親は自身が安心しているときには娘のニーズに敏感に応じる感受性を持っていたことが考えられる。そして、この母子の相互作用を可能にした要因として、母子の命が何より大事と明言して移動を決断した父親の存在感が大きいことも指摘しておきたい。

3-2. 19日間の母子分離と里親養育の後の1歳9か児の遊び

2つめの遊びの場面は、ロバートソンフィルムからの一場面である。この記録映像はイギリスでRobertson夫妻によって1950年前後の期間に撮影されたものである。夫のJames Robertson（1911-1988）は精神科ソーシャルワーカーでかつ精神分析家であり、John Bowlbyの共同研究者でもあった。彼は妻のJoyce Robertson（1919-2013）と共に、生後17か月から3歳の幼い子どもたちが数日から数週間の間、養育者から引き離された分離期間の様子を映像で記録した。

3-2-1. 背景及び遊び場面のエピソード場面[1]：1歳9か月　女児　Lucy

【背景】

1歳9か月になるLucyは20代後半の夫婦の第1子で、体を上手く使い、聡明に集中して遊ぶ子どもであった。言葉はまだでていなかった。母親の第2子出産に伴い、数回の慣らし訪問の後、Robertson夫妻宅で、養育母親となるJoyce Robertsonの世話の元、母親の

[1] 概要はRobertson,J and J（1989）から著者が訳出した要約である。

退院まで過ごすことになった。10日の予定だった入院は合併症のため長引き19日間に及んだ。

分離期間の初日は、様子を見に来た父親と楽しく遊んだ後に置いて行かれて泣き出し、寝付けぬ夜を過ごしたが、数日すると徐々になじみ、特に養育母親になついていた。母親の写真を見せられると、笑顔になったあとで機嫌が悪くなり、投げつけた。２週目に入るとイライラして癇癪をおこすことが増え、食べ物を拒絶したり物を投げたり、自分をつねるなど自分を攻撃したりした。Lucy は荒れた行動が２日続いた後、養育里親になだめてもらいたがるようになり、里親家族に豊かに感情を表現するようになった。一方で訪問した父親にはよそよそしくなり、訪問日の夜はうなされていた。２週目の後半にはイライラが減り、養育母親に親愛の情を向けることが増し、養育母親にダメと言われたことを受け入れたり、なだめられると身をゆだねるなどが見られた。３週目、17日目の父親の訪問の際、父親が自宅近くの公園に連れていくと、Lucy はご機嫌で帰宅したが、別れの際には父親のキスから顔を背け、父親がいってしまうと床に身を投げ出して暴れたり、就寝時には大泣きしながらしがみついてきたりした。

19日目の母親との再会の日、Lucy は戸惑いを見せながらも母親のもとへかけていった。その日の就寝時に母親が身をかがめてキスしようとした途端、興奮して泣き出し、母親にぎゅっとしがみついた。再開の３日後に養育里親の Joyce が訪問すると、突然泣き出し、その後も養育里親への愛情と拒否感を揺れ動く姿を見せたり、帰ろうとする養育母親を泣きながら追いかけて、養育母親と自分の間でドアをしめ、泣き叫んだりと複雑な反応を示した。

Lucy の混乱をワークスルーする機会が必要だとの Joyce の見立てにより、その後数週間にわたる数回の養育母親の訪問が行われた。Lucy は気分の揺れはあるものの、徐々にかんしゃくの頻度と激しさが減り、機嫌よく過ごせる期間が長くなった。

【遊び場面】[2]

再開から３週目に、私たち（Robertson 夫妻）は、Lucy の自宅近くの公園で Lucy と彼女の母親に会った。

Lucy は、分離経験を再現する遊びを始めた。Lucy は私（Joyce）の手を取り、私と一緒に母親から離れて歩き、時折母親の方を振り返った後、私の手を振りほどいて、私の目の前を走って母親のもとに戻り、母親に愛情を込めて挨拶したのだ。それから、Lucy は母親から離れて、私を探し出し、私の手を引っ張って、再び母親から離れるようにして一緒に歩いた。そして、十数メートルほど離れたところで、再び走って戻ってきて、母親の腕

[2] 遊び場面は、養育里親である Joyce Robertson の報告（Robertson,J.and J,1989）を著者が訳出した要約である。

の中に飛び込んでいった。このような分離と再会の遊びを7、8回繰り返した。

その後、遊びの流れが変わった。Lucyは今度は母親の手を取り、芝生に座った私を残して母親を連れていった。十数メートルほど進んだところで、Lucyは振り返り、母親の手を離して、さきほどの遊びを逆にしようとするかのように私の方に走ってきた。しかし、Lucyは私が手を差し伸べるのを素通りして走り去った。これを何度か繰り返した。彼女が私のところに戻ってくることはなかった。

その後、彼女は別の遊びを考案した。私たち（母親とJoyce）のうち一方の腕の中に座って、もう一方の腕に腕を伸ばし、笑顔で乗り換えをするのだ。しかし、最後は母親に寄り添い、私には懐いているものの、再び母親の娘に戻ったのだということを示した。

このゲームはLucyにとってもう十分になった。Lucyはベビーカーのところに行って、家に帰りたいことを示した。

3-2-2. 遊び場面の考察

【子どもの体験】

背景にまとめた状況からは、Lucyが愛着対象である母親と父親との分離と、新たな愛着対象となる養育母親との間で、どれだけ混乱し、不安を覚えていたのかが読み取れる。

この遊びの中で、Lucyは自分から、分離と再会を再演するような遊びを考えだしている。十数メートル離れては、自分主導で戻る遊びは、自宅とRobertson家との間で起きた出来事の可視化ともいえる。このような遊びによる①自己表現によって、“私は体験したのはこういうことだったのだ”と体感的に理解していたのかもしれない。

実際にLucyの体験した現実と、Lucyが考えた遊びのもっとも大きな違いは、現実はLucyの預かり知らぬところで展開し、訳もわからず先の予想もつかなかったことに対して、この遊びはLucyが主導権を握り、Lucyのコントロール感のある中で、展開していったという点である。現実場面では、再会した父親にまた会えなくなるのか、次に会うことはできるのかなど予想もつかず、再会できた母親に関しても疑念があったであろうことが混乱した反応からうかがえる。しかし、この遊びでは、終始Lucyが手を引っ張り、遊びを主導している。この遊び場面においては、やむなく引き起こされた分離の時とは違って、Lucyのコントロールの元で分離を主導し、そして、自分の力でまた戻っていくことを体験できたのだ。これは、遊びの治癒的な力でいうと㉑コントロール感（Schaefer,C.,&Drewes,A.2011）の体験である。このコントロール感の回復がLucyの混乱と傷つきを癒す最も大きな要因として働いたのではないかと考える。見通しのつかない無力な体験を、この遊びを考案して実演したことによって、予測可能でコントロール可能な体験へと変えたのである。

この遊びは7、8回繰り返されたことから、⑥徐反応（アブリアクション）が起きてい

たことも推察できる。徐反応とは、同じ遊びを繰り返すことによって、トラウマとなる出来事の再演と除去をし、力とコントロール感を得ることである（大野木,2019）。離れていくドキドキ感、自ら戻り母親に受け止めてもらった安堵感、肌で感じる温かさ、母親のにおいなど、Lucyは五感と内臓感覚をともなってこの遊びをしたのではと想像する。こうした遊びの中での体験は神経系の変化として学習され、繰り返されることによって、より定着していく。母親との再会の遊びを繰り返す部分では、⑫アタッチメントの強化もうかがえる。

Lucyは、より負荷の高い、数十メートルの距離を移動する遊びで、自宅から養育家庭への行き来を表現した後に、実の母親と養育里親を並んで座らせて、行き来する遊びをした。この遊びによって、“両方のどちらかに忠誠を誓うのではなく、いずれにも受け入れられ、仲良くしてもいいのだ”ということを体感していたのではないかと思われる。そして、最後は実の親で終えることで、“両方と仲良いけど、やっぱりママの子なんだ”と再確認して終わっている。

【大人の関わり】

この分離体験では、分離前から慣らし訪問を数回行い、再開後に連絡を取り合い、理解を共有し、再訪問を計画するなど、母親と養育母親の連携の良さがあった。また、遊び場面において、大人の姿の描写はされていないものの、Lucyの視点にたった遊び場面の叙述からは、Lucyの様子を温かく見守りながら関わったことが推察される。Lucyのこのような遊びが成り立ったのも、二人が子どもの遊びを邪魔せず、7、8回も繰り返すのを好きにさせたからであり、その背景には、「Lucyには分離と再会に関する混乱のワークスルーが必要だ」と見立てた判断があった。当然、そこには“この遊びは意味がある”という理解があったものと思われる。こうして、理解と受容のまなざしを向けられてはじめて、Lucyの遊びは混乱を乗り越えうる体験として意味を持ったものと考えられる。

４．考察

本稿で取り上げた２つの場面は、いずれも外傷体験になりうるような、混乱と恐怖や不安を感じる体験であったと思われる。

２つの実際の遊び場面の考察からは、以下のことが言える。

1）大人に伝わりやすい言語でのコミュニケーション力が発達途上の段階の２歳児であっても、つらい体験の後に、遊びの表現を用いて自分を表現でき、応じてくれる大人の存在があれば内なるニーズに基づいて遊びを活用することができる場合がある。

2）今回の２つの場面では、いずれも子どもの自発的な遊びを、大人が何かこの子にとって意味があるものとして尊重し、共に関わり、その動きが求める反応を大人の側が模

索して提供を試みたことが、その子の表現したいことを十分実現させることに役立っていた。

3）つらい体験のあとの遊びが治癒的な働きをもった遊びとして機能するためには、その子どもの身近な大人が敏感な応答性をもち、理解と好奇心と共感を持って、温かく関わることが必要である。

4）身近な大人が敏感な応答性を発揮し、落ち着いた神経系でその場で温かく寄り添うためには、その大人自身が安心できる状況にいることが不可欠と思われる。

子どもにとってある出来事が外傷体験になるかどうかは、出来事のインパクトだけでなく、子ども自身の資質やレジリエンス、怖い体験のときにサポートを受けられたかどうかが関わってくる（藤原，2020）。2歳前後の子どもの場合、まだ十分に言葉を使用できず、時間の概念もまだ未熟であるため、世間一般の「まだ小さいから何も分からないだろう」という想定に反して、予期せぬ予想を超えた事態により圧倒されやすいといえる。しかし同時に、身近な大人の支えがあれば、大人の協働調整の助けと遊びの治癒的な力を使って、回復と成長に向かっていく力も持っていることが示唆された。

5．おわりに

乳幼児のPTSDの存在が国内外で報告されている（友田ら，2014）中で、乳幼児が大人の存在の助けを得て、遊びを使って自ら回復する力を検討することは意義のあることと考える。今後も乳幼児の遊びの事例報告を重ね、つらい体験後の乳幼児の身近にいる大人への支援の道を探っていきたい。

6．引用文献

藤原ちえこ．（2020）．本気でトラウマを解消したいあなたへ　日貿出版社

Kathy, L. K.and Stephen, J. T.（2008）Nuturing resilience:Helping clients Move Forward from Developmental Trauma An integrative somatic approach.North Atlantic Books. 花丘ちぐさ，浅井咲子（訳），（2019）．レジリエンスを育む　ポリヴェーガル理論による発達性トラウマの治癒　岩崎学術出版社

Kottman, T.（2011）. Play therapy basics and beyond second edition

Landreth, G. L.（2002）. Play therapy: The art of the relationship（second edition）. Taylor & Francis Books, Inc.

山中康弘（監訳），（2007）．プレイセラピー　関係性の営み　日本評論社

大野木嗣子．（2019）．はじめてのプレイセラピー　効果的な支援のための基礎と技法　誠信書房

Robertson Films.（2014）. Young Children in Brief Separation（http://www.robertsonfilms. info/10/28/2014. 取得）

Robertson, J and J.（1989）. Separation and the very young.Free Association Books. 128−134

Schaefer, C.,&Drewes, A.（2011）. The therapeutic powers of play and play therapy,.In C. Schaefer（Ed.）Foundation of play therapy second edition. Hoboken,NJ:Wiley. 15−22.

富田昌平.（2016）. ２歳児クラスにおける想像上の怖いものを楽しむ遊び：その展開過程と保育者の働きかけ　心理学第37巻第１号　2130

友田朋美，杉山登志郎，谷池雅子.（2014）子どものPTSD－診断と治療　診断と治療社

VanFleet, R.（2008）. Canine play therapy: The benefits of cross-species play for children's deuelopmental and psychosocial health. Sarasota, FL: Professional Resource Press.

Winnicott, D. W.（1991）. The Child, the Family and the Outside World. London: Penguin Books